

第2回 港湾工事における大規模仮設工等に関する技術検討委員会 議事概要

日時：平成27年 3月12日（木）10:00～12:00

場所：経済産業省別館 3階 310会議室

出席者：磯部委員長、高橋委員、大幢委員、佐藤委員、小泉委員、山崎委員、仙田委員
（代理）、尾崎委員、浅輪委員、遠藤委員、松永委員、下迫委員、水谷委員、
井山委員 他

1. 主な議事

○磯部委員長の進行の中、事務局より資料について説明すると共に、検討委員会メンバー等より検討課題等の意見交換を行った。

2. 主な意見等

○浮体関連について、静的な釣り合いは事前に確認するが、「動揺する概念」は、事前に検討することになっているのか（基準等に規定されているか）確認する必要がある。

○架設関連については、道路分野、橋梁分野ではかなりの知見が蓄えられていると思うので、他分野からの事例の収集を検討する。

○架設の工事は、ある程度の年数がかかる。想定外力として考えられる風や地震についてどう設定するか確立された知見はあまりない。

○仮設工を標準施工として発注者が費用を計上する場合、仮設工の標準的な施工方法とその範囲についてどう考えるかは課題である。

○技術の進歩に伴い、標準以上の安全対策を共通の知見として加えることによって、工事の安全が図られるというサイクルはあると思うが、どの段階でどういう手順で一般化して、工事の設計に加えていくかは、今後の検討が必要である。

○技術提案で採用した工事を行って、フィードバックするような形で次の工事の施工計画の検討につなげる仕組みができると、より標準的な施工として反映しやすい。

○施工・施工管理のあり方に関する課題の「管理基準の考え方」は、誰であってもしっかりチェックできるように、管理基準を明示するシステムの検討が重要である。

○施工・施工管理のあり方に関する課題の「対策工法の事前想定」では、事前想定だけでな

く、事前想定した結果についてしっかりと評価することが重要である。

○施工途中の場合に検討すべき段階を示すことで、施工を見据えた設計ができるものと考えられる。例えば施工途中で冬を迎える場合は、冬季波浪による危険性が増す。施工途中の安全性を考える時は、施工のプロセスや時期について検討することが重要である。

○施工途中は、完成時より外力に対する危険性は高いが、設計では完成時より低い外力を想定することが一般的であるが、施工途中に、想定するより大きな外力が起こった時はどう対処したらよいかリスク管理的な考え方が必要である。

○リスクアセスメントを行い共有することが重要である。

○リスクアセスメントからリスクマネジメントという考え方を施工途中では考えることが重要である。

○現状では、施工から設計にフィードバックしないので、フィードバックするシステムを検討する必要がある。

○施工検討業務から基本設計にフィードバックする考え方をアシストする形は効果がある。

○施工中に起こること、設計条件、設計哲学等を施工に反映させるために三者連絡会を推進しているが、どういう観点で議論をすればよいかをとりまとめたい。

○安全率を上げるという話ではなく、どういう被害が起こるかを想定して、復旧できる範囲はどこか掘り下げることによって、合理的な設計となる。

○プロジェクトの工事では、様々な段階で委員会が開かれており、委員会で施工に係る議論がされていると問題が起きにくい状況にある。外部の意見を取り入れて検討することは、事故の防止につながる。

以 上